

これから夫は聖女様を愛する予定です

——凍<sup>い</sup>てつく刃<sup>やいば</sup>が大地を支配する季節、死神の吐息が空を覆い、白銀の世界は永遠の静寂に閉ざされる。一筋の光が大地を照らすだろう。時が止まる瞬間、聖女は静かに姿を現し、絶望の淵<sup>も</sup>に立つ者たちに、彼女の手が差し伸べられる——

アークレディア国の現王太子、バルディオス・ラヴェルディアが誕生した時……予言者はこう言った。

その予言を聞いた管理人は眉<sup>ひそ</sup>を顰<sup>ひそ</sup>め、それは決定事項かと尋ねる。

予言者はこう答えた。

『王太子殿下が成長した時、異世界から聖女が舞い降りて世界を救う。その聖女は彼の真実の相手だ』

その予言に一番胸を撫<sup>な</sup>で下ろしたのは、この国の令嬢たちかもしれない。

なぜなら、この国で王族の婚約者になるということは、同時に小指をなくすことを意味しているからだ。世継ぎを産むまでの間、王家に伝わる秘術で小指をとられてしまう。

「殿下は素敵だけど……小指をとられるのはごめんだわ」

「女性の心は小指に宿るっていうのに、困るわよね」

適齢期の令嬢たちは口々に言う。

小指をなくした女性は……他の男性に恋をすることもないので不貞をすることもないと、アークレディアでは考えられているのだ。

「身体の一部を預けるだなんてあり得ないわ。ああ、殿下のお相手が私でなくてよかった」

令嬢たちがそう言うて安心する一方で、国は異世界の女性との間にできるであろう子を、王家の後継者にするのは反対だった。

聖女が来る前に、この国から婚約者を選出して王太子と子どもを作らせなければ……そうして選ばれたのが、侯爵家の令嬢レアセル・アルヴェステシアだったのだ。

「いいか？ レアセル、お前の役目は聖女様が現れるまでに王太子殿下と世継ぎを作ることだ」

「はい」

王太子との婚約を告げられた成人の日、レアセルは父の言葉にただただ頷いた。

レアセルと王太子バルディオスの結婚式準備は急ピッチで進められ、レアセルはバルディオスと会うより前にウェディングドレスの採寸をされた。

でも、レアセルはそれで全然かまわなかった。

「気持ちを蔑ろにされているわ！」なんて憤慨することはあり得ない。

（キヤー！ わ、私が殿下の婚約者、つまりはいずれ正妻に……？ 信じられない！ 夢みたい！）

レアセルはその日の夜、こっそり自作したバルディオス君人形を寢床でギュッと抱きしめた。

（幸せ……！）

レアセルはこの婚約に非常に満足していた。

なぜならレアセルは、バルディオスの大大大大ファンだからだ！

物心ついた頃には、レアセルは自分より少し年上の王子様の存在にあこがれていた。

（デビュタントで初めてご挨拶をした時、すごく素敵だった……）

レアセルが初めて王の前で挨拶をした時、バルディオスもその隣に座っていた。

彼は、首元に手を添えてそっぽを向いていたのだけれど。

（バルディオス様は私のことを見もしなかったけれど、身分が違うのだし当たり前だわ。そんなこと……なんの問題にもならない）

だから自分がバルディオスの婚約者選ばれたと聞いて、倒れてしまうかと思った。

婚約者には絶対に公爵令嬢のソフィア様が選ばれるだろうと思っていたからだ。

二人は年齢こそ違いが幼馴染で、パーティーの時などいつも仲睦まじい。美しいソフィアと格好いいバルディオスが並ぶと、とても釣り合いが取れていて、一对の人形を見ているかのようだった。

（お二人の結婚式……絶対絶対お祝いに参上いたします！）

レアセルはそう誓っていた。

しかし、現王の弟を父に持つソフィアとバルディオスはいとこにあたる。それでは子を生すには

血が濃すぎると懸念したバルディオスの祖父である前王が『侯爵家以下の令嬢と結婚させるべし』と遺言を遺していたのだ。

身分が侯爵令嬢以下で独身で、年がバルディオスに近い令嬢——そんな存在はレアセルしかいなかった。他の令嬢たちがこっそりと胸を撫で下ろす中、レアセルはまるで夢を見ているような心地になった。



「初めまして。私、レアセル・アルヴェステシアと申します」

「……バルディオス・ラヴェルディアだ」

婚約後の初めての顔合わせで、レアセルが深くお辞儀をして挨拶したのに対し、バルディオスは腕を組んで不機嫌そうに名乗るのみだった。

非常に失礼な態度だ。普通の令嬢ならば、機嫌をそこねてもおかしくない。

しかし、レアセルは素っ気ない態度にも興奮した。

（キヤー！ 生殿下……生の殿下よ！）

「殿下、お茶をどうぞ」

「……ああ」

挨拶の後、庭のガゼボに用意されていたティーセットで、レアセルがバルディオスのカップにお

茶を注ぐ。

（殿下のお茶を注いじやった！）

レアセルは感動で目を潤ませた。

なんと言っても、レアセルにとってバルディオスは世界一素敵な男性だ。

実力で王の座を勝ち取った、戦闘派の祖父の血を引いているだけあって、バルディオスはとても体格がいい。ガッチリした体躯に涼しげな顔立ち……

（素敵！ 今は私しか殿下の横顔を見ていないのよ！ 独り占め！）

横顔なのはバルディオスがレアセルに興味がなさそうに、そっぽを向いているからなのだが……レアセルは全く気にする素振りはなく、ただただバルディオスをうっとり眺めた。

軍服のような正装も、その短い黒髪も……レアセルは全てを目に焼き付けておこうと思った。

（私はあくまでもお飾りの婚約者……聖女様が来るまでの繋ぎなのだし、次いつ会えるかわからないもの……）

レアセルはバルディオスがカップを持つ節くれ立った手を盗み見て、コッソリ鼻息を荒くした。

（ああ、手までかっこいい……！）

レアセルは幸せだった。

あまりペラペラと話してはせつかくの落ち着いた空間の邪魔をしようと思い、レアセルは静かにバルディオスの後ろの庭を眺めるふりをした。

（素敵素敵素敵！ かっこいい！ お茶飲んでる！ 生きて動いてるわ……今私が吸った空気……）

もしかしたら殿下の吐息が入っているかも！ 殿下の体内を一度巡った空気が今私の身体の中を巡っているかも！ 嬉しい！ 気絶しそう！ 幸せ！

にこにこ微笑むばかりのレアセルと、目を合わせようとしないうバルディオスの初お茶会で、互いに名乗った以上の会話が発展することはなかった。



「なぜハルカに冷たく当たる？ 彼女が庶民だからか？」

「……違います。ただ、マナーがなっていないので」

私はパサリと扇子を開き、苛立ちのあまり引きつる口元を隠した。

私の夫である王太子殿下は、聖女ハルカの腰を抱き、愛おしそうに彼女を見つめながら言った。

「なあ、もう少し彼女を温かく迎え入れることはできぬか？」

ハルカは目を潤ませながら可愛らしい声で「殿下……いいのでございます。正妻はレアセル様なのですから……」と夫に告げる。

うんざりして、思わず扇子を振り上げた私を、夫は冷たい眼差しで見つめた。

「独占欲が強く……意地の悪い女は后に相応しくない」

そう言って、聖女を強く抱き寄せたあなたは、私を牢獄に入れた。

冷たく湿った石の上で、寝転がったまま動けなくなったことはあるか？

とても惨めで苦しい。それでもまだ生きていたかった。死の間際——死にたくないと願った。

まだ自分に優しく接してくれていた頃のあなたを思い出すと、涙が頬を伝う。

ああ、殿下——



「は——」

レアセルは飛び起きた。心臓がドクドクと痛いほど鳴っている。

変な夢を見た。

聖女と名乗る女性が異世界からやってきて、バルディオスと結婚する夢だ。

それは予言通りで、全く問題ない。

問題は、正妻のレアセルが側室の聖女を虐めた挙句、投獄されてしまうことだ。

（な、な、な、なんて夢なの!? 私……この独占欲をどうにかしないと牢に入れられちゃう!! 殿下を眺めることができなくなっちゃう!!）

レアセルはもしバルディオスが側室を作っても、仲良くしていくつもりだった。

大好きなバルディオスが選んだ女性を、大切にしたいからだ。自分は運よくバルディオスと結婚できたが、本当はバルディオスが真に愛する人が正妻になるべきなのに……

レアセルは美味しいところをいただいているのだから、せめて側室にはいい思いをしてほしいと思っていた。

それが予言通り聖女様だったとしたら尚のこと。

彼女はバルディオスが心から愛する……真実のお相手なのだから。

（意地悪するつもりはないけど……私の中に眠る独占欲がそうさせているのかな……？　こんな夢を見るなんて……）

予言を受け入れていたつもりだったが、この夢は、「バルディオスにのめり込みすぎると……彼の想い人に意地悪をしてしまいますよ？」という、婚約者の立場に浮かれていた自分に対する未来からの警告のような気がした。

レアセルは今までの己の行動を反省し、バルディオスを独占しないことを誓った。

（……わきまえて楽しくいこう、よりよい人生のために）

レアセルはそう思いながら、自作のバルディオス君人形をギュッと抱きしめた。

「お嬢様、大丈夫ですか？」

「あ……ええ、平気。ちよつと変な夢を見ただけ……」

飛び起きた際の物音を不審に思ったのか、侍女がそつとドアを開けてレアセルの無事を確認した。

レアセルはまだドキドキと高鳴る胸を押さえながら力なく笑う。

（ああ……嫌だな）

レアセルはなんだか嫌な気分を抱えたまま再び眠りについた。

しかし、自分の立場をわかまえることを誓ったにもかかわらず、レアセルはこの悪夢にこの後も何度も苦しめられることとなる。



結婚式までの間、レアセルとバルディオスには定期的にお茶会の機会が設けられている。

「殿下、お会いできて光栄でございます」

登城したレアセルが挨拶とともに笑いかけると、バルディオスは若干迷惑そうに眉を寄せ「あぁ」とだけ答えた。レアセルにとっては、その塩対応もまたご褒美だった。

「殿下、日差しが暑くありませんか？　あの木陰に……」

「いや、いい」

日差しが強かったのでレアセルは木陰にバルディオスを誘うが、すげなく断られてしまう。

（至近距離で殿下を堪能する恩恵が……！）

レアセルは邪な心<sup>よこしま</sup>が通じてしまったのだと、己の欲望を恥じた。

その後案内されたガゼボで、レアセルは先日市井<sup>しぜい</sup>で買い物をしたことを話した。

「皆さん工夫して生活されていて……とても明るく元気でいらつしました。今の政治が成功している証拠ではないでしょうか」

「……」

レアセルが目キラキラさせてそう言っても、バルディオスは彼女を一瞥するのみで、無言を貫いている。

「……す、すみません」

その様子を見たレアセルは過ぎたことを言ってしまった、と口をつぐむ。気まずい沈黙が流れ、誤魔化すようにバルディオスにクッキーを勧めた。

「あ、殿下！ こちらのクッキーはいかがですか？ 私はこのバターがたっぷり入ったクッキーが好きで……フルーツも好きなのでこのドライフルーツが入っているものにしようかと思えます」  
（クッキーを食べているところを見たいわ！ そんな顔で咀嚼するのかしら……）

「いや、今はいい」

「左様でございますか……失礼いたしました」

（くっ！ バレているんだわ……私の邪な心が！）

レアセルは目を伏せながらクッキーを手で割り、口に押し込む。

その後も話は弾まず、今日のお茶会でも二人の仲は深まらなかった。

自室で就寝準備を済ませたレアセルは、昼間のお茶会での出来事を思い出し、ため息をついた。  
（やっぱり殿下への接し方が露骨すぎるのかもしれない……めちゃくちゃ堪えているけれど、殿下への想いが噴き出してしまっているのかも……）

レアセルはバルディオスのことを考えながら鏡を眺めた。

ヘラヘラと頬をゆるませて目尻を下げた、性格の悪そうな女性が映っている。

（不気味だわ！）

レアセルは愕然とした。バルディオスに思いを馳せている自分が、想像以上に不気味だったからだ！

（こ、これは……聖女様が来る前に婚約破棄されてしまうかも……！ だから私が邪なことを考えている時、殿下はより塩対応だったのかわ。殿下はちよつと無口なタイプなだけだと思ってたけど……私が不気味だから喋りたくなかったのかも……）

そうして——レアセルは、邪な心が顔に出ないようになるまで、鏡の前に座り続けた。



「あー、やっぱり素敵い！」

レアセルはコッソリ絵師に描いてもらった彼の姿絵を眺めながら悶えていた。

この後王城で行われる舞踏会に、レアセルはバルディオスのパートナーとして参加するのだ。

舞踏会であまり露骨にバルディオスを見つめるわけにはいけないので、出発前に自宅でバルディオスを補給しておこうという寸法だ。

（でも隣で空気を吸うことができるし……ふふ、私って本当にラッキーだわ！ 生きててよかった）

レアセルは初めてバルディオスと行く舞踏会に浮かっていた。

舞踏会の開催が知らされたその日のうちに指定された色のドレスを注文し、ダンスのレッスンも始めたほどだ。

バルディオスはダンスが得意だ。レアセルのデビュタントの時、公爵令嬢ソフィアと共に、流れるような美しいダンスを踊っていたのが目に焼き付いている。

(きつと殿下は運動神経もよくていらつしやるのだわ)

イケメンと美しい女性の対比は素晴らしいものだ……と興奮したのをレアセルは覚えている。

(もしかしたら殿下とダンスを踊る機会に恵まれるかも……もともと軽いステップくらいなら踏めるけど、念のためレッスンをしておかなければ！)

まさかバルディオスと本当に踊る機会があるなんて、そんな恐れ多いことはレアセルは思っていない。まあ、念には念を入れて……というだけだ。

しかしそんな軽い気持ちで始めたレッスンは、思ったよりも大変だった。

(私って、こんなに踊れなかったのね……)

レアセルはあまり運動神経がいい方ではない。完璧に踊れるようになるまで何度も何度も練習を繰り返して、足の皮が何回も捲れてしまった。

おまけに、バルディオスの婚約者になったことで小指をとられてしまったレアセルは、他の男性と組むことすらできない。そのため、レアセルはずっと一人で鏡に向かって練習するしかなかった。(練習の結果、ワルツだけは完璧になったけど……まあ、私なんか殿下と踊る機会はごきませ

んから大丈夫よね……)

自分のダンスの腕に不安を感じつつも気を取り直したレアセルは、少しでも普段より美しく見えるように着飾り、馬車に乗り込んだ。

緊張を和らげるため、今日一日のシミュレーションをする。

(まずは王宮の入り口で降りてもらって……殿下がいらつしやるのを待つでしょ？ 殿下が来たら習った通りに一緒に入場して……殿下に嫌な思いをさせないようにマナーに気を付ける……)

——しかしそのシミュレーションは、初めから意味のないものとなった。

なぜなら呑気に馬車から降りたレアセルを、バルディオスはすでに待っていたからだ。

(え？ あわわわ！ お、王族をお待たせしてしまった！)

「で、殿下。大変申し訳ございません……お待たせしていたとは」

レアセルは慌てて、深々と頭を下げた。

「ふん……待っておらん、今来たのだ」

「左様でございますか……しかし、今後もう少し早めの行動をいたします」

レアセルはバルディオスの言葉にほっと胸を撫で下ろす。

(よ、よかったわ……今度からはもっと早く出なければ！ ちょっと準備に時間をかけすぎたかも……今度は準備をしながら姿絵を眺めて時間を短縮させましょう。効率アップです！)

レアセルが脳内で反省会をしていると、バルディオスが「まだ時間がある、庭でも散歩するか」とつまらなそうに言った。



「はい、夜のお庭を拝見したことはございませんので……ぜひ」  
レアセルは嬉しくて堪<sub>たま</sub>らなかった。

バルディオスと夜の庭を散歩できるなんて……!

(あー! 楽しみ! 月夜に照らされる殿下はさぞ素敵なことでしょう! 幸せ幸せ! 私、生きてよかった!)

レアセルは内心興奮しているのを悟られないように、ゆっくりとバルディオスについていく。

後ろから見てもバルディオスは遅<sub>おそ</sub>く、筋肉のついた背中が月夜に照らされる様はそれはもう最高だった。

(眼福眼福……)

月明かりに照らされた庭は夢のように幻想的だ。花々も昼間見る時と違う顔を見せていて、レアセルはそれにもうっとりした。

(殿下と婚約しなければ、こんなことは経験できなかった)

レアセルは顔を上げると「夜の庭は日中とはまた違う印象で素敵でございますね」とバルディオスに言う。

「……そうか」

バルディオスはただの時間つぶしだからか、かなり素っ気ない返事をレアセルにしたが、彼女は全然気にしていない。

(あー夢みたい……!)

しばらく庭を散策した後、「……そろそろ行くぞ」とバルディオスが声をかけてきた。

「かしこまりました」

レアセルはウキウキと返事をして、バルディオスの後を追った。

庭を抜け、王宮に繋<sub>つな</sub>がる廊下を進むと大きな広間がある。廊下には剣を携<sub>たづな</sub>えた騎士が何人も控えていて、いつも以上に厳重な警備が今日は特別な催しがあることをレアセルに再認識させた。

(緊張してきちゃった……)

レアセルは柄にもなく硬くなる動きを誤魔化すため、前に行くバルディオスにバレないようにこっそり深呼吸をする。

扉の前でバルディオスが立ち止まり、レアセルに肘を差し出した。レアセルは戸惑い、バルディオスを見上げる。

「……マナーを習わなかったのか」

その様子を一瞥<sub>いちべつ</sub>したバルディオスが、呆れたようにそう言う。

レアセルはバルディオスがエスコートしてくれるのだと気付き、慌てて彼の腕に手を添えた。

「すみません」

(ゆ、夢みたい! 殿下に触っちゃった!)

レアセルの心臓はもう爆発寸前だった。興奮で荒くなりそうな息を鎮めるため、目を伏せる。

(ありがとうございます! ああ……こんな日が来るなんて……! 生きててよかった! ありがとう世界!)

レアセルが全てに感謝していると、広間の扉が開かれて美しい楽器の演奏と喧騒が聞こえてきた。途端に緊張が戻ってきて、思わずバルディオスの腕をキツく握りそうになるが堪える。

（私のものじゃない、私のものじゃない……あくまでも聖女様がいらつしやるまでの繋ぎの婚約者……）

自分の立場を見失いそうになってしまった、とレアセルは何度も心の中で繰り返す。心を落ち着かせ、隣に立つバルディオスに合わせてゆつくりとお辞儀をした。

はたから見ればレアセルは非常に堂々とバルディオスの隣に立ち、ふわりとした雰囲気を見せる素敵な女性だったのだが……レアセル本人の心は非常にうるさいものだった。

（あー……嬉しい。最高……殿下にエスコートしてもらっちゃってるんですけど!? し・あ・わ・せ!）

レアセルは誰にも悟られないようにこつそりと幸せを噛みしめながら広間へ歩みを進める。バルディオスと並んで歩く日が来るなんて……幸せすぎて倒れてしまいそうだ。

「殿下、お久しぶりでございます」

広間に入つてすぐ、ソフィアがバルディオスに話しかけてきた。

（あー、素敵……いいツーショット……!）

レアセルはイケメンと美女のツーショットに興奮しながら、微笑みの裏でコソコソと二人を盗み見る。

（ハアハア……最高……最高だわ。美男美女が会話している様はなんて素敵なのかしら……! 栄養が……目から栄養が入り込んでくるわ!）

「……あら？ あの方……侯爵家よね？」

レアセルがソフィアとバルディオスを笑顔で眺めていると、背後から何やら話し声が聞こえた。

（……侯爵家？ 私のことかしら……？ 違う?）

「公爵令嬢のソフィア様を差し置いて、王太子殿下の婚約者になったにしては……いまいちよね。予言の聖女の件だって、ソフィア様がお相手なら関係ないでしょうに。侯爵家の娘なんかと婚約したから運命が変わってしまったのでは？」

「ぶ……聞こえるわ」

「本人に？ 平気よ、名前を言っていないもの」

令嬢たちの会話を聞いて……レアセルは（これは私のことでございますね!）と思い、振り返る。そこには、クスクス笑い合う二人のご令嬢がいた。

（ご、誤解されている……この二人の言い様では、まるでソフィア様が私に負けてしまったみたいだわ!）

「違うんです……誤解です! あの、私……別に私だから選ばれたわけでもないんですの。ソフィア様が素晴らしいのは、皆様もおっしゃいますように明らかなのですけれど……私はただ、血が濃くならないように選ばれただけでございまして! 私である必要はなく、たまたま偶然、ラツキーでこの立場にありますゆえ……本当にお恥ずかしい話でございますが……あ、私のことではな

い、別の王太子殿下の婚約者になった侯爵令嬢のことだったら申し訳ございません。自意識過剰すぎますよね……」

レアセルは一気にそこまで畳みかけるように話すと、扇子で顔を隠す。すると二人のご令嬢は「あら……おほほほ……」とその場から軽い愛想笑いをしながらいなくなってしまった。

（ああ……私が挙動不審だったせい！ ソフィア様は全然悪くないということがちゃんとわかっていただけたかしら……？ 次はもつと上手く伝えなくちゃ！ おさらいしておきましょう！）

レアセルは今の伝え方の何がいけなかったのか、うーん……と首をひねる。

その結果、あまり謙遜しすぎるのも……と思ったので（次からはソフィア様を持ち上げつつ、自分はこの立場になれて光栄だと伝えてみよう！）という結論に達した。

前に向き直ると、いつの間にかバルディオスはいなくなってしまうていた。

けれど放置されているにもかかわらず、レアセルはにこにこ笑顔を崩さない。

（こうして殿下とここまで来られただけでも幸せでございます！）

レアセルがご機嫌にそこで佇（た）っていると……またしてもコソコソと話し声がある。

（ああ……！ まだだわ……！ でも落ち着いてレアセル。私のことではないかもしれないわ）

レアセルは次こそは失敗しないように心を落ち着かせて会話を耳をそばだてた。

「クスクス……婚約者なのに、放置されてるわ」

「仕方がないのよ、殿下は他に心を寄せてる方がいるのでは？ ……それって考えなくてもわかる

わよね。あんなに仲睦（なかむつ）まじいのですもの」

「本人だけが知らないのかしら？ ……殿下もご結婚相手がソフィア様ではないから、この先聖女様を愛するようになるのでは？」

レアセルは（やっぱり自分のことだ！）と思い、ゆつくりと会話をしていた二人の令嬢を振り返る。

「違うんです。今、私がこうして一人なのは放置されたのではなく……殿下が気を使ってくださいっただんだと思います。私が他の方とお話をしていたので……」

急に話しかけられた令嬢たちが啾然（しゅうぜん）としているのをよそに、レアセルは話し続けた。

「それに私以外に殿下に好きな方がいるのは仕方がないことだと思っんです。だって無理矢理私と婚約させられてしまったから……でも確かに、私はお恥（は）ずかしながら殿下の想い人を存じ上げないんです……それって知っていた方がいいのかしら？ ご挨拶した方がいいと思います？ どちらの女性かご存じですか？ 教えていただけます？」

もしバルディオスに想い合っている女性がいるなら……本人にご挨拶した方がいいのかもしれないと、レアセルは思っただ。それに、バルディオスがまるで悪い男かのように言われているのも申し訳なかった。

（私のことなんか好きになるわけがないのは仕方がないの……だって急に決められた縁もゆかりもない侯爵令嬢なんだから……誰がそんな女性を好きになれるというのでしょうか！）

「人間には相性というのがございますから……いくら努力しても難しいものは難しいですよ」

レアセルは少しだけ悩ましげに頬に手を当てる。

「お二方はどう思われますか？」

レアセルが扇子で顔を隠し、二人の返答をワクワクして待っていると……

「……レアセル様のことを申し上げていたわけでは」

「ほほほ、誤解があるようで……大変失礼いたしました」

しばしの沈黙の後、二人の令嬢はそう頬を引きつらせないなくなってしまった。

（え！ 私のことではなかったの!? ……ああ……私って人付き合いが苦手なのかもしれない……）

レアセルはこの短時間で二度も、楽しく談笑しているだけのご令嬢の間をおかしな空気にしてしまつて……とても恥ずかしくなつた。

「何をしている？」

落ち込んでいる中、声をかけられて振り返る。

そこにはバルディオスが両手に飲み物を持つて立つていた。片方はレアセルの好きな果実のドリンクだ。レアセルはまさか自分に用意してくれたのかと口元が緩みそうになり、慌てて扇子で隠す。

（ま、待つて……落ち着くのよレアセル……そんな幸せが簡単に舞い込むわけがないわ。殿下も果実がお好きなのかもしれない！ それにどちらもお一人で飲まれるのかもしれないし……そうね、気付いていないふりをしましょう！）

「ご令嬢に話しかけられたと思つたのですが……人違いだつたようで」

レアセルはドリンクには触れずそう言つて笑う。

しかし、レアセルの念力が通じたのか、バルディオスは「……飲むか」と言いながら果実の方をレアセルに渡した。

「ありがとうございます、いただきます」

（あら、うふふ……まさか本当に私のために？ ……なーんて、ウソウソ！ そんなわけないのはわかつているわ！ たまたま偶然！ 殿下からお飲み物をいただいちゃつた！ 幸せー！）

レアセルはニツコリ笑つてそれを受け取ると口をつけた。

婚約者になつてからというもの、「誰かに毒を盛られる可能性があるから気を付けろ」と実家の父に耳が痛くなるほど聞かされている。とはいえ、バルディオス自ら手渡してくれたものに毒が入っているか確認することなどできない。

（私はラッキーだから……それが気に入らない人もいる。もしかしたら殿下が毒を盛ることだってありえるかも……なにせ、私は邪魔だから）

レアセルはそう思いながらバルディオスの横顔を見上げた。

（それでもいい！ 殿下に盛られた毒で死ぬなら本望かも……なんてね！ さすがに死にたくないわ。死んだら殿下を見られなくなっちゃう！）

レアセルは「美味しいですね」とドリンクの感想を言いつつ、こっそり舞踏会用にドレスアップしたのか、普段よりも華やかな格好のバルディオスを見つめた。

（あー……盛装姿も素敵！ もっと目に焼き付けたいけど……隣にいとあまりそれができないの

よ！ 近すぎるのも残念な点があるわ……遠くからガン見したい……！」

うっとりすぎて息が詰まったレアセルは見るのを諦めて、呼吸を取り入れることに専念することにした。

その時、ソフィアが再びやってきて「殿下、手持ち無沙汰なのは？ 私と踊りませんか？」とバルディオスに声をかける。

（え？ これって殿下を遠くからジロジロ見るチャンスなのでは？）

レアセルは美しい二人のダンスの様子を思い浮かべ、目を潤ませた。

「レアセル様？ バルディオス様は緊張されている様子なので……私と一曲踊ることをお許しいただけますか？」

ソフィアはレアセルに一言断りを入れた。

「はい」

（私に決定権なんかないのに……気を使ってくれるなんて！ 本当にソフィア様は優しい方だわ……もちろん問題ございません！）

「はい、もちろんです」

レアセルは感動してしまった。

（やはり美しい人は心も美しいんだわ！ こんな私にも優しくしてくださいなんて！）

「ソフィア、今日は……」

「ふふ、そうですね？ 楽しみにされてました？」

ソフィアは何か言いかけたバルディオスの手を取り、ふわりと笑った。

（殿下もソフィア様と踊るのを楽しみにしてらしたのね！ あー！ キュンキュンする！）

レアセルはそれを見て口元が緩んでしまい、慌てて扇子で隠す。

（い、いけない……不気味……不気味な顔になっているに違いないわ）

挙動不審なレアセルを気にも留めず、バルディオスとソフィアは手を取り合い、ダンスフロアへ優雅に足を進める。フロアに二人が到着すると、人の波が割れ、彼らのために空間ができた。

（誰もが皆……お似合いの二人に釘付けでございますね！）

——とレアセルだけは思っていたが……周りの注目はレアセルに集まっていた。

王太子の婚約者が蔑ろにされているぞ、と。

「かわいそうにね」

そんな声が聞こえてきたので、レアセルは（ああ！ また誤解されている！）と思って声の方を向いた。またも二人の令嬢がクスクス笑っている。

「違いますの。ソフィア様は格下の私に、わざわざ許可を取ってくださいました。なんて優しい方なのでしょうか……私はお二人の仲睦まじい姿を見られて幸せに思っております」

レアセルはそう言うてにつこり笑う。

すると先ほどレアセルに表面上は同情していたであろう令嬢たちは目を逸らした。

「え、い、いえ……レアセル様の話では……」

「まあ？ それは失礼いたしました。私ったら……自意識過剰で恥ずかしいわ。では、どなたのこ

と？ そんな風に思われるなんて……助けて差し上げたいわ」

（ああ……またやってしまった！ 私って本当に自意識過剰だわ！ でも……こんな華やかなパーティーで同情されてしまうなんて、何かあつたに違いないわ）

レアセルはもしかしたら友だちになれるかもしれないと思って、その人物の詳細を尋ねた。

「い、いえ……大した人物では、あの、レアセル様とはお話するのも許されないような方なので……」

（私と話をするのも許されない？ そんな方がいらつしやるの？）

レアセルが不思議そうな顔を見ると、二人の令嬢は慌てたようにその場からいなくなつてしまった。

（ああ！ まだだわ！ また！ やってしまいましたわ！）

レアセルは羞恥で赤くなつた頬を隠すために扇子を広げた。

（恥ずかしい……消えてしまいたい……いいえ、この失敗は忘れましょう！ ……そのためにほら、美しいものを愛でましょう）

レアセルは気を取り直すと、バルディオスとソフィアが踊る姿をうつとりと眺めた。

（なんて素敵なのかしら……）

すると、またもひそひそと話す声が聞こえる。

「ふ……浮かれて殿下と同じ水色のドレスなんて着ちゃって」

「ふふ、なのに結局は放置されて……気の毒、無理矢理色を揃えたんでしょね」

（……私のこと？ ……じゃないのかしら？ わからない……！ このドレスの色は国から指示されたもので、別に合わせたわけじゃないんだけど……で、でも……私が無意識に合わせちゃったのかもしいない！）

レアセルは頬がかつと熱くなるのを自覚してうつむいた。

確かにバルディオスはレアセルと同じような色のスーツを着ているし、ソフィアもこれまた似たような色のドレスを着ている。

（キヤー！ やだ！ た、確かに！ なんて私のドレスと同じような色を殿下が着ているんだろって不思議だったのよ！ でも私は国に指示された色を選んだだけだし、なんならお揃いなんてラッキー！ と思ったりしていたのだけれども……）

下を向くと自分のまとうドレスが一層目に入つて、レアセルはスカート部分をぎゅつと握りしめた。

（……は！ もしかしてあの指示は私じゃなくて、ソフィア様宛てだったのでは!? それが間違つて私にも伝わってしまったのかしら……!）

今まで異様に浮かれていたから気付かなかつた事実、レアセルは気付いてしまった。

（だって……よく考えたら殿下が私なんかと同じ色を着るはずがないのよ……！ なんて色を指定されたのか、と思っていたけど……身分が上の人と被らないためかと……で、でも！ 確かに思いつき殿下と色が被ってる!）

レアセルは考えに考えた結果——自分のドレスに果実酒をぶっかけることにした。

王太子の婚約者の突拍子もない行動は当たり前のように周囲に混乱を呼び、騒ぎを聞きつけた使用人たちが慌ててやってくる。

レアセルは彼女たちに流れるような速さで休憩室に押し込められた。彼女たちの迅速な対応のおかげで、レアセルのはしたない姿を目にした者は周囲にいた数人の他、ほとんどいないだろう。

「本当に申し訳ございません。よろめいてしまつて……」

話を聞いて駆け付けた母に、レアセルはそう言った。

王宮の使用人から替えのドレスを受け取り、母と二人にしてもらいたいと伝えて下がってもらおう。

「……なーをやっているのですかー!」

母は鬼のような顔を見ると、扇子でビシバシとレアセルを叩いた。

「ち、違うのでございます! お母様! これには事情がございますして……!」

「もー! こんなに大きなパーティーで! もー!」

レアセルの母はブツブツと文句を言いながらも、手早くレアセルの服を脱がせた。母は独身時代王宮で侍女をしていたので手際がいい。

「お母様、聞いてくださいませ!……あの……私、ドレスの色を間違えてしまったみたいで」

レアセルはコソコソと母に打ち明けた。

「え? なんですつて……?」

「あの……たぶん、私はこの水色以外の色を着なさいと指定されたではありませんか? みんなに笑われてしまつて……」

レアセルは先ほどを思い出して、羞恥で顔を真っ赤に染めた。

「ソフィア様が殿下と同じお色を着ていらしたので……あのドレスの色指定のご連絡はソフィア様にするのを間違えて、私に伝えてしまったのだと思いますの……」

レアセルは顔から火が出そうだった。はたから見れば、自分は殿下と同じ色のドレスを用意して浮かっている、名ばかり婚約者の侯爵令嬢だったに違いない。

「そう考えると、とてもじゃありませんが……あの水色のドレスを着ている勇氣は……その……ありませんでした」

そうしょんぼりとうつぶすレアセルに、母はそれ以上何も言えなかった。

(レアセルには荷が重すぎる……)

レアセルの母は、もともとこの婚約に反対していた。

しかし、侯爵家の嫁に過ぎない彼女には意見する権利すらない。

(王族は公爵家の人間と結婚すればいいのに、なんで今回に限って侯爵家から婚約者を選出するのかしら……そしてそれが、なんだつてうちの娘なのよ!)

レアセルの母は、心根の優しい娘が王族のドロドロした諍い<sup>いさか</sup>についていけるとは思えず、喉元まで出てきた「婚約なんてどうにかして破棄してしまいなさいな」というセリフを呑み込む。

「ほら、手袋も替えましょう……色を合わせなくちゃ」

代わりにそう言うと、レアセルの手袋をそつと外した。

(我が娘ながら美しい手だわ——ただ、左の小指がないけれど)

レアセルの母は、レアセルの手袋の小指部分にせつせと布を詰め、彼女にはめた。レアセルの小指は婚約が決まった時に、王族のしきたり通り、とられてしまった。

——間違はなく王族の子を産んでもらわなければなりませんから——  
小指をとられた痛みに顔を歪ませて……額に汗を滲ませたレアセルに向かい、彼女の処女膜を確認した医者は冷たくそう言った。

麻酔は子宮に溜まるので元気な子を産めなくなる、そんな本当か嘘かわからない理由でレアセルは麻酔なしで小指をとられた。

今、レアセルの小指は聖堂に保管されているはずだ。

一人王族の子を産めば返してもらえる……しかし、逆を言えば産まなければ一生返してもらえないのだ。

レアセルが自分の先がない小指を見て少し寂しそうな顔をしたのを、レアセルの母は見逃さなかった。

しかしレアセルはそんな様子に気付かれないようにするためか、「お母様、この手袋の色……すごく素敵」とニツコリ笑った。

レアセルの母は一瞬瞳を潤ませたが、「ふ……そう？」とレアセルに笑い返した。

（レアセルは受け入れているのよ、泣き言も言わずに。私が泣いてどうするの）

「……辛くない？ 大丈夫なの？」

「え？ はい、平気です。この手袋、ちょうど私にピッタリなサイズなので」

レアセルは母に向かいそう微笑んだが、母はそんなことを聞いたのではなかった。

しかし、ここでそれを追及する必要もない……レアセルの母は扇子で歪んだ口元を隠す。

「そう？ 辛くなったらいつでも言いなさい……お母様は、傍にいますから」

レアセルの母は、色んな意味を込めてそう言った。

「はい、お母様」

ニツコリ笑うレアセルに、母の意図は伝わっただろうか。

「……どこに行っていた」

レアセルがコソコソと元の位置に戻ると……もうバルディオスとソフィアはダンスを終えてしまったようだ。不機嫌そうなバルディオスにレアセルは迎えられる。

（あー！ 私の間が抜けているせいで貴重なダンスシーンを見逃してしまったわ……！）

レアセルは絶望に膝をつきたい気持ちをもぐと抑え、バルディオスの質問に答える。

「私の不注意でドレスを汚してしまい、休憩室に……」

「……」

バルディオスはレアセルを一瞥すると「ふん……」と鼻を鳴らした。

レアセルはそんなバルディオスの反応を見て、顔を真っ赤にしてうつむく。

（……ああ！ コイツやつと気付いて着替えたのか、の「ふん……」かしらこれは！）

バルディオスはそれっきりレアセルに興味もない様子でそっぽを向いている。



レアセルは猛烈に反省した。

自分はバルディオスの婚約者なのだ。自分が恥をかくことは、バルディオスにも恥をかかせているようなものではないか、と――

（次からは連絡を真に受けすぎず、その色にも見えるような別の色を用意することにしよう……！　あまり露骨に指示に従わないのも……よくないよね）

人をあまり疑いたくはないが、ラッキーで婚約者になっただけの自分を面白く思わない人もいるだろう。

レアセルは自分の情けなさにトホホ……と扇子を広げると口元を隠した。

恥ずかしくて死にそうだ。

（調子に乗ったつもりはなかったけれど……やっぱり浮かれてはいたんですね……）

レアセルは幸せすぎる環境に、冷静でいられなかった自分を反省する。

すると――バルディオスにぶつかり、現実に戻されたレアセルは身を小さくした。

（パーティーも終盤になって……人が多くなってきたみたい）

油断すると密着してしまうバルディオスからレアセルはさりげなく離れる。

多くなった人のせいで、バルディオスも押されてしまっているのだろう。

しかし……お揃いのドレスを勝手に着て浮かれ、さらにバルディオスに身を寄せていると思われるでは堪らない。

（お願い……！　これ以上混まないで……！　私はわきまえてるタイプの名ばかり婚約者なんだ

す……！　皆さん！　信じてくださいまし！）

レアセルは必死に心の中で唱えた。

本当に本当に……レアセルは調子に乗ってなんかいないのだ。別にバルディオスに愛されようなんて、全然思っていないのだ。

それなのに……それなのに……それなのに……！

（なんだか傲慢さが出てしまったのかしら……？　もしかしたら、私を嫌う人が王族側にいて……嘘のドレス情報を伝えたのかな……いやいや、もしそうだったとしても、違うとしても……考えていいことはないわ、でも……）

レアセルは誰かが自分に対して、悪意を持っているんじゃないかと疑心暗鬼になった。

（……いいえ、違う。みんなから恨まれている可能性もある。……私はラッキーなもの）

レアセルはそっと深呼吸をして、心を整えた。

（品行方正でいなくちゃ。極力これ以上恨みを買わないようにして……私が王太子妃となった時に、国民の支持が多少あれば……たとえ言通りに聖女様が来ても、夢みたいな酷い最期にはならないはずよ）

レアセルが市井を気にしているのはそのためだ。彼らの生活が気になる気持ちももちろんあるが、顔を出してボランティアなどをおけば、ある程度市民からいい印象を持たれるだろう……そう思っていた。

（イメージがよければ……処刑されたりはしないかもしれないわ）

いくら王族でも、国民から印象のよい王太子妃の首を刎ねることはできない。だからレアセルは極力貴族からも、誰からも悪い印象を持たれたくなかった。自分は後ろ盾も何もない……ただの侯爵令嬢だからだ。

眉根を寄せて考え込んでいたレアセルは、突然腰を引き寄せられて我に返った。

「……危ない」

レアセルが顔を上げると、バルディオスが眉を顰めていた。どうやらバルディオスがレアセルの腰を引いたようだ。

「す、すみません……あの、ちょっとぼんやりしてしまつて」

人波に押されて誰かにぶつかりそうになっていたのだろうか。

バルディオスはイライラした表情でレアセルの方をチラリと一瞥すると「ふん」と鼻を鳴らす。いつもならご褒美の塩対応も……今のレアセルにはなんだか申し訳ない。

（なんだか喜んだら不謹慎なような……）

レアセルは、偽物の中身が詰まった左手の小指を意味もなく触った。バルディオスはレアセルがまたフラフラするのを心配しているのか、腰を抱いたまま前を見ている。

（いつもなら気絶するくらい喜ばしいことが起きているというのに……なんだか申し訳ないわ。私……そんなに人に迷惑をかけていたのかしら）

レアセルは様々な方向から刺さる視線にコッソリため息をつく。

（……やつてしまったことはもう仕方がない。次は絶対失敗しないようにしよう……！）

レアセルが心の中で誓いを立てていると、バルディオスが前を向いたまま問いかけてきた。

「ワルツは踊ることができるのか」

フロアに流れる曲は、いつの間にかゆつくりとしたワルツ調になっている。

「はい、ワルツなら少しかだけ踊ることができます。でも、殿下はダンスがお上手でいらつしやいますから……ワルツでは退屈ですよ」

「……ワルツもたまには悪くない」

「初心に戻れることもあるのでございますね！ 素敵でございます！」

（さすが次期王でいらつしやいます、殿下……！ なんて素晴らしいのでしょうか！ 殿下バンザイ！）

レアセルはバルディオスの向上心の高さに思わず涙ぐみそうになったので慌てて扇子を広げる。

「……俺はワルツも踊る」

「そうでいらつしやるのですね。殿下はいつも難易度の高いダンスをソフィア様と息がぴったりで踊つてらつしやるから、てつきり……お二人のダンスはまるで美しい神々のダンスのようでした」

レアセルは先ほどの二人のダンスを思い浮かべ、頬を染めた。

「……君は踊らんのか」

「はい、私はあまりダンスが得意ではなくて……それに、小指がございせんから」

レアセルは左手を自分の顔の横に持つてくると笑った。

「……」

バルディオスは呆れたような沈黙を返され、レアセルは申し訳なくなった。うつむいて、手袋の上から本来小指があるであろう所をふにふにと押す。

（おかしなことを言ってしまったかしら……あー！ でも、また一つ殿下のことを知っちゃった！ 殿下ってたまにはワルツを踊ることもあるのね……！ いつか踊るところを見られるかしら……!?）

「……暑いな」

レアセルがバルディオスの新情報に内心悶<sup>もた</sup>えていると、バルディオスは首元を緩めた。

「暑いですか……？」

レアセルはさほど暑さを感じていなかっただったので同意しなかったのだが、バルディオスは「ああ……」と呟いたきり、そっぽを向いている。

（この角度も素敵……!）

レアセルはぼんやりとバルディオスに見惚<sup>みと</sup>れ……妙に彼の顔が赤いことに気付く。

「左様でございますか、ではお庭に涼みに出られてはいかがでしょう？ それともバルコニーになさいますか？」

レアセルは扇子をパタパタとあおいでバルディオスに風を送り、そう提案した。

（いつも殿下はあまり顔色が……いいえ、表情すら変わらないけど、珍しいこともあるのね。……私、レア殿下に遭遇してる……! こんなラッキー、なかなかないわ!）

「それとも、冷たいお飲み物を取ってまいりましょうか？」

庭に行く気分ではなかったのだろうか、動く気配のないバルディオスにレアセルは尋ねた。

「いや、いい」

バルディオスは飲み物を取りに行こうとするレアセルを制し、「ふん」と鼻を鳴らした。

（ああ！ 顔を真っ赤にしてらっしゃるわ!）

珍しいバルディオスに興奮しているレアセルを尻目に、バルディオスは無言で歩き出す。

レアセルはそれを見送ろうと、扇子をあおいでいた手を止める。

「……」

するとバルディオスは足を止めて、レアセルの腰をぐいと自分の方に引くと「……君も来い」と呆れたように言った。

「……かしこまりました」

（え、私も一緒に!? でもそうよね、殿下一人では体調を崩したら困るもの。一応私が婚約者なのだし、一緒に行く権利がある……! え？ どこに行くの？ キャーやだやだ！ 夢みたい!）

レアセルは浮かれる心を押し殺し、バルディオスが進むままについて行く。

バルディオスは庭に向かっていているようで、レアセルはソワソワしてしまった。

（えー! パーティーを抜けて二人で庭に行くなんて、まるで恋仲みたいじゃない!? なーんて、ふふふ! 調子に乗っちゃ駄目よ、レアセル! 不幸が訪れる!）

庭に出ると、月明かりのみだったパーティー前とは違い、足元を灯<sup>あか</sup>りがゆらゆらと照らしている。（キレイ……）

レアセルが足元をうつとりと眺めていると「バルディオス様……？」という美しい声が聞こえた。

レアセルが顔を上げると、そこには一人で庭に立つソフィアがいた。  
その瞬間、レアセルはバルディオスの謎の行動の意味を理解した。

（あー！ 殿下はソフィア様に会いにきたのね！ だから顔が赤かったのだわ！）

レアセルはさりげなくバルディオスの手の中から抜け出し、前へ出る。

「ソフィア様、ご機嫌麗しゅう」

「……あら……？」

挨拶をするレアセルを、ソフィアは不思議そうな目で見た。

その雰囲気から気付いたレアセルは顔から火が出そうになった。

（キャー恥ずかしい！ 私のようなちっぽけな存在……ソフィア様に認識されているわけがないに……！ 自己紹介してからご挨拶をすればよかった！ また失敗だわ！）

「私、レアセル・アルヴェステシアと申します」

レアセルは内心猛省しつつ、頭を下げて自己紹介をする。

「アルヴェステシア……ああ、侯爵家の……はじめまして。あなたも大変ね」

ソフィアは少し考えるような動作をした後、パツと花のような笑顔を見せた。

「お恥ずかしながら……」

レアセルはソフィアが自分を思いやるような言葉を言ってくれたので、喜びに震えそうになる。

（ソ、ソ……ソフィア様が私を心配してくださったわ！ た、大変！ こんなことある？）

レアセルは感動に目が潤んできたので、慌てて扇子を広げた。

心を落ち着かせようとうつぶわいてみると、バルディオスがレアセルの存在を隠すように前に出る。

「……何をしている」

バルディオスはソフィアに向き合うと、低い声を出した。

（こんな美女が一人でお庭にいらっしやるなんて……殿下もご心配されて当然だわ……）

向かい合う二人は月の光に照らされて……いつもよりさらに美しい。

レアセルはそんな二人の邪魔をしないように、庭からそっと抜け出す。

（今夜はなんていいものを見せていただいたのかしら！ 本当はずっと見ていたいけど……そんなことしたら二人の時間の邪魔よね……！）

レアセルはルンルンとした足取りで庭を後にした。

（あー、やっぱりイケメンには美女よね……見てるだけで癒されちゃうもの……）

レアセルは王宮の廊下を優雅に歩きながら、そっと両手で自分の頬に触れた。すると、忘れていた左手の小指のことを嫌でも思い出してしまう。

（私の小指……一生返ってこないのかしら……）

レアセルは、小指などなくても生活に支障はないと思っていた。

人差し指や親指がなくなるのは困るが、小指はほとんど生活に使っていない、と。

でもいざなくなると、とても不便だ。物が持ちづらかったり、触りづらかったりするのだ。

（実際に経験してみなければわからないことだわ……）

レアセルはそれに加えて……ぽつかりと胸に穴が空いたような……なんだか寂しいような、忘れ

物をしてしまったような……そんな感情に時折悩まされていた。

レアセルは偽物の小指をふにふに触ると、聖堂に向かって足を進めた。

（一人出産しないと小指は返してもらえない……わかつてはいるけど、ハードルが高いわ……）

レアセルはため息をつきそうになるのを我慢しながら、コツコツとヒールの音を立てて廊下を歩く。

王宮の隣にある聖堂は、国民ならば誰もが自由に訪れることができる。だが、こうして王宮の中からのルートを知っているのは限られた者だけだ。

そこにレアセルの小指は保管されている。

廊下を進むと徐々に<sup>ひとけ</sup>人氣がなくなっていく。最初の頃は多少すれ違っていた使用人たちにもほぼ会わなくなってきた。

廊下の端に着くと、少しだけ空気が変わる。レアセルは自身の背丈の半分くらいの小さなドアの前に立ち、首から下げた鍵を胸元から取り出した。

ガチャ……と鍵がゆっくり開く音がしてレアセルは扉をそっと開ける。

その中に身を小さくして入ると、真っ白くて広い空間の中にポツリと立つ管理人がレアセルを迎えた。

管理人は男性なのか女性なのか……よくわからないが、とにかく美しく、長くてきれいな銀髪を背中あたりまで伸ばした背の高い人物だ。

「いらつしやい」

「あ、すみません……小指が見たくなつて」

レアセルが管理人にそう告げると、すでに木製のテーブルの上にレアセルの小指が入った瓶が置かれていて、管理人は手でそれを指し示した。まるでレアセルが来ることを知っていたかのようだ。

「会いにきたのかい？」

管理人はふわりとオレンジの香りを漂わせながらレアセルに尋ねた。

レアセルはなんだか無性に悲しい気分になって、ポロポロと涙を零しながらコクリと頷いた。

「……私、小指があつても……他の男性に身体を開いたりしません」

レアセルは小指を眺めながらポツリと言った。管理人から渡されたハンカチで目元を拭う。

「君はそうだろうね」

管理人はコポコポとお湯を沸かしながらコーヒー豆を挽く。そして挽いたコーヒーをフィルターに入れると、そこにお湯を回しかけた。

ふわりと部屋にいい香りが広がり、レアセルはそれを吸い込むように深呼吸をする。少しずつ落ちるコーヒーをぼんやり眺めた。

（いい匂い。心が落ち着くわ……）

「それでも、小指がないから身の潔白が証明できるじゃないか。小指があつたら面倒なことも多いものだよ？ はい、どうぞ」

管理人は小さなカップの中ほどまで入ったコーヒーをレアセルに渡すと、ミルクカップからミルクを注ぐ。



(殿下が咳をしてらっしゃる……これはもしかすると、一度殿下の身体に入ったなんらかのものが私の体内に入るチャンスかもしれないわ……)

レアセルがバルディオスの飛沫を感じるために精神を統一していると、羽根ペンを投げやりな動作で渡された。

「……ふん、君も書け」

レアセルは「何を……？」と首を傾げる。

バルディオスはそっぽを向きながら「……聞の……練習をする。必要だから署名しろ」と吐き捨てるように言った。

(聞？ 私と殿下が？)

レアセルは頭をぐるぐるさせるが、いずれにせよ拒否権などない。

(……えー！ 練習？ 本当に愛した方とするための練習かしら……!? わ、私でいいの？ 熟練の女性じゃなくて……初心者でいいのかしら!? あ、お相手が乙女の場合、私で慣れておいた方がいいということ？ 聖女様のためかしら？ それともソフィア様？ どうしよう！ 光栄だわ！ もしかしたらこれで子どもができるかも！ 小指が戻ってくるかも……!)

レアセルは口から垂れそうになる唾液をゴクリと飲み下すと、丁寧に署名をした。

「儀式の際に上手くいかんと困るからな」

「左様でございますか」

レアセルは荒い呼吸が漏れ出さないように気を付けながら返事をする。

(儀式？ この練習は儀式のためなのね！ そ、そんなことより……い、いつ？ いつ練習とやらが行われるのかしら？ まさか今？ ああ！ もう少し念入りに洗っておけばよかった！ どこをとは言わないけれど……！ もう少し強めに洗っておくべきだったわ……!)

「……なんとも急なので驚きました」

管理人は署名された書類をバルディオスから受け取ると、光るポストのような箱の中に投函とうかんしながらそう言った。

「……いつでもいいはずだ」

「まあ、そうですが。あーあ、冷めてしまった」

管理人は先ほど淹れたコーヒーを一口飲んだ後、バルディオスをからかうように笑った。なんだかいつもより機嫌のよさそうなバルディオスの様子に、レアセルもニッコリ笑う。

(ソフィア様との逢引あいびきが上手くいったのかしら。やはり私……席を外してよかった)

その時、瓶のなかの小指がゆら、と揺れたような気がしてレアセルは顔を近付けた。けれど……(そんなわけないわ)と苦笑する。血の通っていない小指が動くわけがない。

なんだか小指を見ていると悲しい気持ちになってきたので、レアセルは目を逸らす。

「私……そろそろ会場に戻らせていただきます」と頭を下げてレアセルは小さな扉をくぐった。そっと確かめるように左手小指があるべきところに触れたが、そこには綿が詰まっているだけだった。それでもぼんやりとレアセルはそこに触れ続けた。

なんだか……忘れた気持ちがあるような気がする。

「……ま、待て」

レアセルはその声に我に返り、声の方を振り返った。バルディオスが小さな扉から身を屈めて出てくる。

「殿下！」

レアセルは慌てて扉に駆け寄ると、バルディオスが扉をくぐる手伝いをするように手を引く。

レアセルに助けられながら扉から出たバルディオスは立ち上がると、髪を手で撫で付けた。彼は窓の外を眺めながら「…ふん」と鼻を鳴らす。

レアセルはホコリが付いたであろうバルディオスのズボンをパタパタと手で叩いた。

王太子ともあろう人がズボンにホコリを付けていたら大変だ。それに……

「……そんなことせんでいい」

「失礼いたしました」

（くっ……私の邪な気持ち<sup>よこしま</sup>が漏れ出しているせいで……！ 殿下に少しでも触れたいという邪悪な心がバレているわ……！ このままでは不幸が訪れる……！）

反省したレアセルは立ち上がり、バルディオスの横に立つ。彼が肘を差し出してきたので手を添えると、二人はゆつくりと歩き出した。

「終わりのワルツがもう始まっていた」

バルディオスがポツリと言う。

「……まあ、それは急がなくてはなりませんわね」

王が最後の挨拶をする時、王太子とその婚約者が不在だなんてことはあつてはならないだろう。

（もう少し時間を気にして行動するべきだった……！ あ……もしかしてそれで殿下は私を捜しにきてくださったのでは？ キャー！ もー！ やだやだ！）

「父上は気まぐれだ。気にしないでいい」

「……左様でございますか」

レアセルはバルディオスに縋りつきたくなるような心地をグッと耐えた。

（不安……不安で堪らない！ この正解はなんなの!? 本当に私たちはいなくても大丈夫なのかしら……！）

バルディオスの言った通り、廊下には終わりのワルツの音楽が会場から微かに漏れ聞こえている。

（ああ……！ せめて曲が終わる前に入りたい！）

そうは言ってもバルディオスも急いでいるようで、二人はかなり早足で会場の扉を開けた。

ちょうどその時、別れのワルツの演奏が終わる。

（……ま、間に合った……）

レアセルは肩で息をしながら前を向き、安堵で肩の力を抜く。思わずバルディオスを見上げると、彼は愕然<sup>がくぜん</sup>としていた。

（……なんで!?）

その様子を不思議に感じたレアセルが再び会場に目を向けると、ソフィアが男性と向かい合ってお辞儀をしているのが見えた。



(……あら……ソフィア様……)

レアセルはバルディオスがそれを見てショックを受けているのだと思い、気の毒に感じて少しだけ腕に添える手に力を込めた。

するとバルディオスは勢いよくレアセルの腰を抱いたので、そつと寄り添うような形を取る。

バルディオスがソフィアに当てつけたい気分になったのだとしたら、協力してあげたいからだ。

(でも……ソフィア様も仕方がなかったのだと思うけど……)

いくら二人が想いあっていたとしても、決まった相手のいない女性がダンスに誘われては、断るわけにいかないのではないだろうか？

レアセルはバルディオスを慰めようと彼を見上げた。「きつとソフィア様は断りきれなかったのだ」と言っただけようとしたのだ。

するとバルディオスもレアセルを見ていて、レアセルの瞳は揺れた。

今まで目が合ったことなど……あつただろうか？

レアセルが動揺している間に、バルディオスは素早い動きでレアセルの頬に口づけ、再び前を向いた。

(……え？)

頬に当たったふにやりとした感覚がまだ残っているような気がする。

(……夢……？)

予想もしなかったバルディオスの行動を確かめようとレアセルが頬に手を当てると、確かに手の

ひらの熱を感じた。ないはずの小指がトクトクと脈打っているかのようだ。

(夢じゃない……？)

レアセルが混乱している間に、少し眠たそうな王が閉会宣言をした。

恐らく睡眠をとりたくなつたのであるが、レアセルはそれどころではない。

(キヤー！ ラ、ラッキー！ バルディオス様からく、く、口づけをされちゃった……！ ソフィア様への当てつけだとしても最高！ 生きててよかった……！ 神様ありがとうございます！ もう一生ほつぺは洗わな……い！ なんて、それは無理よね、やだ……！ も……！ し・あ・わ・せ！)

レアセルは扇子をそつと開いてニヤニヤの止まらない口元を隠した。

さらにバルディオスがギュッとレアセルを抱き寄せてきたので、レアセルはそのまま身を任せる。

「……ふん」

バルディオスが鼻を鳴らしている。

(あー！ 殿下が鼻を鳴らしてるわ！ 呆れているのかしら……ちよつと近寄りすぎちゃった？ でもでも！ 今は気付かないふりをしちゃいましょう！ ああ……幸せすぎて怖い……せめて視界からのご褒美は遮断しておきましょう……)

レアセルはそつと目を閉じる。あまり幸せが重なりすぎない気がしたからだ。

こんなに幸せな状況で、さらにバルディオスの素敵な姿を目から取り入れたら罰が当たる可能性すらある。

「……おい」

「は！」

レアセルはバルディオスの声にはっとして目を開ける。辺りはすでに解散ムードで、目を閉じていたせいで、時を駆けてしまったようだ。

「……帰るぞ」

バルディオスが呆れたようにそう呟くのを聞いて、レアセルは頬を赤くした。こんな姿を見たらさらに呆れられてしまうのでは？　とうつぶく。

「……はい」

バルディオスはうつむいたままのレアセルを連れて、目をショボショボさせた王に挨拶を終えた。  
（今日はとても楽しかったわ……）

レアセルが余韻に浸っていると、バルディオスが足を止める。

「……バルディオス様」

その時、ソフィアがバルディオスに声をかけた。気付けば、だいぶ人の姿は疎<sup>まば</sup>らになっていた。  
（いつの間にこんなに人がいなくなつたのかしら。私が調子に乗ってるところを見られちゃった……？　でも……そのおかげでソフィア様が声をかけてきたのかもしれない）

バルディオスがレアセルを利用した当てつけが功を奏したのか、ソフィア自らバルディオスに歩み寄ってきたようだ——とレアセルは思った。

喜ばしいはずなのに、レアセルの胸にはモヤモヤとしたものが広がっていく。

そして先ほどの調子乗り具合を思い出すと、穴を掘って生き埋めになりたくなってきた。

（ああ……さつきまでは多幸感で頭がおかしくなっていたに違いないわ……今は後悔の念が押し寄せてきている……なんであんなに調子に乗ってしまったのかしら！　もう二度としないので、神様どうか私に不幸を与えないでくださいまし）

人生というのは一割の幸せと九割の不幸で成り立っているものなのだ。

（今日だけでもう一生分の幸せを手に入れてしまったかもしれない……すなわちそれは今後私に不幸しか訪れない、ということなのでは？）

レアセルは目の前に美男美女がいるという恵まれた状況に恐れ慄<sup>おの</sup>き、さらにもう一步後ろに下がろうとしたが、レアセルの腰をバルディオスが抱き寄せてきた。

（キヤー！　何これ！　ま、まさか……殿下、私のことを！　……ふふふ、なんてね……はっ！）

バルディオスの行動に一瞬浮かれたレアセルだったが……当てつけが続いているのだらうと気を取り直す。

（私なんかで当てつけられるかはわかりませんが、お付き合いしましょう！　……殿下、好いた女性が他の殿方とダンスしているのを見るのはお辛いですよね……）

自分にも小指があればな、とレアセルはぼんやり思った。

（殿下は私が別の人と踊ったらどんな気分になられるかしら）

少しくらいは気にしてくれるだろうか、とレアセルは考えたけれど……バルディオスと婚約する前に誰か別の男性からお誘いがあったかと聞かれると……それは……

（ダ、ダメだわ！　小指があっても誰からも誘われない可能性があるわ！）